

北海道民放クラブだより

民放くらぶ講演会

激動の中国：

取材現場の裏側

社会活動部会の講演会が10月6日(金)札幌駅北側のエルプラザで開かれた。講師は平成29年5月までJNN北支局に勤務したHBC報道部の栢崎仁記者(39)、今回からくらぶ員だけでなく、一般の方にも呼び掛けたところ、合わせて51名の方が参加した。



講演する栢崎仁記者(HBC)

講演のタイトルは「激動の中国：取材現場の裏側」。中国で二年半取材した中で感じた数々の話を披露した。

冒頭、支局の仕事は、中国国内の外交、事件、事故の取材だけではなく、北京空港経由が多い北朝鮮関連の取材が増えていると発言。アントニオ猪木議員のインタビュー

―映像を交えて紹介した。

中国は広く、国内各地の取材に行くには飛行機を使うが、外国の取材スタッフは国内線でもパスポートが必要で、さらにゲートで細かいチェックを受けるため、フライト90分前に行かないと乗り遅れるとか。その後、「想像を超える物価高」「中国メディア事情」「中国人の金銭感覚」と話は広がる。

今年前半話題になった「森友学園問題」、中国人スタッフから「なぜ百万円くらいの金で問題になるかわからない」といわれたとか。中国では付け届け当たり前の習慣で、小学校の先生でも一人当たり百万円くらい普通に受け取っている。思えば日系企業の製品発表会に取材に行った時、中国メディアに、いわゆる車代(現金)を渡しているのをよく見かけた。

摘発された元最高指導部メンバーの不正蓄財額が「2兆円」というから、14億人が住む広く大きいお国柄ならではの金銭感覚なのだろうという。おおらかな中国人ならではの話は続く。平成27年8月の「天津爆発事故」。ポロシャツで

取材に行ったら、現場に取材規制線がなく、爆発現場近くまで行けたが、危険なガスが流れたとの情報で、あのサリン事件の時のような防護服を着た軍人が沢山現れ、クルー全員が覚悟を決めたが、難を逃れた事。

平成27年12月、人権弁護士の裁判を取材に行った折、スタッフの中国人カメラマンが規制する警察のバスに連れ込まれ、ポコポコにされたなど、現場でしか体験できない生々しい話があった。



最近の「中国の四大発明とは」高速鉄道、シェア自転車、ネットショッピング、電子決済。電話線が引けない広い中国だけに、ネット

ショッピングやスマホは広く普及、北京では屋台で買物してもスマホで代金が払えるため、財布を持たない若者が増えてきたなど、最近の話題も熱く語ってくた。

およそ90分間休みなく話した栢崎記者に、詰めかけた参加者からねぎらいの大きな拍手が送られた。

北海道民放クラブ俳句会
杉野一博選

春の雪ちぎって小学一年生

春木 太郎

ばあさんとららめっこしてこどもの日
清盛と籠る終日冬深し

伊東 次雄

白球を追いし球児の春ゆけり
菜の花や廃船海を漂いて

船木 美幸

テレビから流れる怒声木の芽どき
うぐいすの鳴いて仏の静かなり

森山 圭悦

ランドセルつばみのぞかす梅二本
やわらかきうねりにあそぶ啄木忌

山本 俊郎

残雪に遮光器土偶ありにけり
佐保姫の午後の紅茶と写真館

滝田 慶子

春昼のジャズの流れる運河かな
春ざれや水門の錆落す音

松原智津子

スカイツリー氏上げ間近の春の月
喪婦りの橋渡る時雪解風

竹之内眞一

フランス語教師のファッション木の芽風
卓袱台に父母の定位置お中日

木宮 節子

ブータンのシボリアゲハという秘蝶
目の大きな春愁の魚もらいけり

上澤 孝二

春疾風あまは一人漁師かな
棧橋の空を抜け出し鳥雲に

鳥交るこちら側から木が伸びて

杉野 一博